第四部

堀口正治先生
追悼文

堀口さんの思い出

２００２年7月
近　藤　　孝

数十mおきに現れる風倒木の下をくぐり、あるものはまたぎながらひたすら歩く。
仙丈ヶ岳から三峰岳に至る仙塩尾根の長い道のりを思い出す。
ﾘｰﾀﾞｰ堀口（３年)、近藤（２年)、大江（１年)、円谷（１年）の４名の１９６７年８月の南アルプス縦走４日目のひとこまである。

剣岳　三の窓、源治郎尾根、東大谷周辺での岩登りと雪上訓練を終えたあと、数パーティに分かれての縦走は堀口さんが提案してきた南アルプスに乗ることにした。
私は北アルプスの岩と雪には少し食傷していた。それは剣岳東大谷の岩登りの時に歩いていた雪渓が崩落して谷の雪融水に落ち込んだショックがまだ消えていなかったこともある。南アルプスのゆったりした山を歩きたかった。

南アルプスの縦走は、期待にそぐわず心を癒すものであった。堀口さんの余裕あるリーダーシップ、メンバーの揃った体力、お花畑、連日の好天、余裕のある行程などなど。
今でもそうだと思うが、南アルプスはテント場が決まっていて、１日の歩行時間はほぼ６時間位に設定されている。朝６時に歩き始めると、１２時には次のテント場に着いてしまい、午後は各人好きなように過ごせた。１６時の天気予報をラジオで聞いて天気図を書き、夕食を作る以外に仕事はない。緊張を強いられる岩登りや雪渓歩きに較べると極楽のような山行であった。

縦走は、剣岳の真砂沢から黒四ダム（まだ工事中）を越えて松本駅でステーションビバーク、飯田線の北伊那から戸台部落に入って戸台川の河原で１泊目、北沢峠で２泊目、仙丈ヶ岳を越え高望池で３泊目、三峰岳を越え井川越えで４泊目、間の岳と北岳を往復して井川越えで５泊目、塩見岳を越えて三伏峠に６泊目、小河内岳と大日影山を越えて高山裏に７泊目、赤石岳を越えて百間洞に８泊目、聖岳を越え聖平に９泊目、上河内岳を越えて御花畑に１０泊目、上河内沢を下り畑薙ダムの気が遠くなるような長い吊り橋を渡って畑薙ダム入り口に着いた。

その日に大井川鉄道に乗り、東海道線金谷駅に着いて解散。堀口さんは東京へ、私は大阪へ、大江は宮崎県大分へ、円谷は福島へと各人の家に戻っていった。
私は山を下りた時のために用意していた着替えのカッターシャツを堀口さんに強引に奪われ、ずっと着ていたぼろぼろのカッターシャツのまま帰るはめとなり、乞食と間違われ変な目で見られた。
大江の方はもっと悲惨で、家に着く前に持ち金が無くなってしまい、登山用の非常食（我々が常に携帯していたのは羊羹、ﾁｮｺﾚｰﾄ、ｺﾝﾃﾞﾝｽﾐﾙｸ）も食べ尽くし、水ばかり飲みながら家に帰り着いたらしい。

翌年、東北大学山岳部及び山の会（ＯＢ会）として初めての海外遠征（アラスカ　ルケニヤ峰）が決まり、東京地区の募金活動を夏の合宿前に行うことになり、我々は堀口さんの家に泊めてもらった。
堀口さんのお母さんは、昨年の夏合宿の時に堀口さんが私からカッターシャツを借りたことを覚え

ておられて、「すみませんでしたね」とお詫びをおっしゃっていた。心なしか、待遇が良かったような気がする。
その頃、堀口さんは、東北大学理学部を退学して、他の大学の医学部を受験するための受験勉強中だったが、夜は我々とトランプで遊んだりとつきあって下さった。

翌々年（１９７０年）４月、北海道の日高山脈に登った帰りに、北大医学部に入学していた堀口さんを札幌に訪ねた。「日高は難しい山というのが定説だが、大したことないよ」と事も無げ言われていたのを思い出す。北大山岳部には入ってなかったはずであり、山登仲間がいたのかどうか、一人で登っていたのか、今となっては知るよしもない。

最後に堀口さんに会ったのは、１９９７年に相原さん、目さんを偲ぶ会が清渓小屋で開かれた時であった。
その時の写真が手元にある。参加者全員一様に歳をとっているが、若い頃の面影は変わらず、堀口さんも昔からのぎょろりとした目でカメラを見ている姿が映っている。

「山岳部員同志のつながりは、兄弟や家族以上のものでなければならない」と我々は教えられた。
山において極限状態になったとき、パートナーが何を考えてどう行動するかを普段から知っていないといけないと教えられた。
ＩＴ技術が進歩した今ではもはやこんな考え方は古いのだろうか。そうではないと思いたい。
全人格的なつきあいをしながら相手の価値観を尊重する。
そのことを教えてくれた山岳部の先輩、堀口さんもその一人である。
ともに登った山、ともに苦労したメンバーを忘れることはない。

堀口さんのご冥福を心より祈ります。

「出会い」

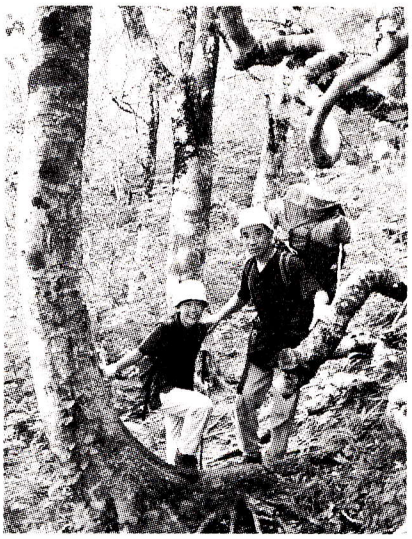
平　泉　　宣

拝復、先日詳細なる源太ヶ岳遭難報告書を戴きました。又、奥様からは特別にお礼の御言葉を頂戴致しました。私共は堀口先生に曾て（二十年余も前の東北大學助手時代ですが）お世話になった學生の一人として、又昔の山仲間として遭難現場に駆け付けたのでございまして御遺族の皆様の御心配や悲しみの深さを思へば力及ばぬところございます。

東北大學艮崚山の会では村上弦（札幌医科大學解剖學教室教授）、八木沼洋行（福島県立医大解剖學教室教授）両君が堀口助教授時代の門下生であり、私共など一學生徒であったにすぎないのでございます。両君からの依頼もあって特に仙台から同日夜を徹してかけつけてくれた千田雅之、太田尚志、保坂正美の三君は当会屈強の山男達。一睡もしないでそのまま深夜から極寒の深雪を踏み締め岩手県警救助隊の方々と共に未明現場に到着して捜索活動を手伝ってくれました。

このたびの受難は神様の運命のいたずらのやうに思われ、私には堀口先生が若い三名の仲間の運命の不幸を全て一身に背負って召されたやうに思われてなりませぬ。源太ヶ岳現場から空への搬送で昇天してゆく先生を見送ったあと、堀口先生は源太ヶ岳源頭をとりまく大深岳連山の豊かな原生林がとりわけお好きで心の山にしておられました、といふ黒瀬先生のお話しを伺い涙こぼれました。合掌。

追って。とりわけ美しい写真をどうもありがたうございました。安全登山のお守りにします。



（一昨年二月・三月と黒瀬先生と厳冬の和賀岳に二度登りました。そのあと八月十三日に家族と一泊二日で和賀岳につれていってくれた時の写真です。

堀口真由子記）

出会い

もう一生会へないから
人はやさしくなる。

別れて心の深さを知る。
あの雪の深さを知るやうに。　　**『詩集・冬の獣道』より**

（東北大學艮崚（ごんりょう）山の会幹事・岩手県立中央病院消化器外科勤務）

堀口正治君との折々の記

２００２年7月１７日

西　尾　文　彦
（千葉大学・環境リモートセンシング研究センター　教授）
（東北大学理学部天文及び地球物理学学科　昭和45年卒業）
（東北大学山岳部　昭和45年卒業　堀口君と同期入部）

私、西尾にとって堀口君の死を南極、昭和基地で受け取った.

はじまり

第４３次南極地域観測隊は、総勢８９名から構成される大所帯の観測隊であった。２００１年１１月２８日２１時、成田空港、特別待合室で歓送の宴の後、それぞれの隊員は見送りの人たちと別れを告げ、空路オーストラリアのパースに向かう機中の人となった。私は隊長としての緊張感と同時に、どうも航空機では南極へ出発する気分にならない。２７次隊で越冬してから１６年ぶり、４度目の南極昭和基地である。涙の別れと南極への長旅の気分を醸し出してくれた「しらせ」の出港の風景を味わってきた世代としては、新しい南極へのアクセスであった。

暴風圏を越えて

１２月１２日、南緯６０度、東経７５度。西向きの航行に入る。１８日頃には、昭和基地に第一便を飛ばし、生鮮食料品や家族からの手紙、贈り物を４２次越冬隊に届けるところまでやってきた。船内ではすぐ天候の話になる。前方には流氷帯が北に拡がり、北上して迂回しなければならないかも？　低気圧が行く手に数珠つなぎに待ち構え、午後から荒れてきた。風が強まり、うねりが右舷（北側）から押し寄せ、大きな動揺が続く。再び、暴風圏の様相だ。隊長公室で観測隊の輸送の打ち合わせをしている時、右舷４３度の傾き、椅子に座っている隊員は倒れ、絨毯の上に座っていた隊員は、滑って、荷物の段ボールと一緒に、壁に激突。幸い怪我はなかったけれど、両足を突っ張って話し合う姿は、滑稽だ。でも、動揺に驚きもなく、絨毯の上を左右の動揺に合わせて滑りながら、キャー、オヘーと奇声をあげながら、楽しむ余裕？　が出てきた。左右に大きく揺れながら、今夜は、ベッドで両足、両手を突っ張って寝るはめになり熟睡は無理だ。この日の夜半にかけて、最大斜度、左舷５３度、右舷４８度の動揺を経験する。壁が床になり激突、幸い打撲程度で済む。器物の破損もあったが、心配なことは船倉の荷崩れである。車両を固縛しているワイヤーが緩むが問題なしの報告をうける。暴風圏は南極への一里塚だった。

安全を維持するための挿話

動揺の続く中で、連日、午前と午後に観測隊の活動のレクチャー、そして安全をどのように維持するのか、これが隊長として最も気配りすることである。事故例として、南極観測に参加した者、越冬経験者の講話を行う。それらの話の中に良い話があった。私と同業で、内陸雪氷・野外観測主任「斎藤隆志」隊員の話である。稚内出身、京都大学の防災科学研究所、３５次隊での越冬経験者でドームふじ建設をおこなった。４３次の内陸旅行隊長である。まずは「安全を守る原則を愚直に守るのだ。手を抜くと死につながる。さもないと、お前、死ぬど！」と説く。そして、成田空港出発

で、見送りの奥さんと子どもの写真をスクリーンに写す。二人とも涙一杯の目を見開いて見送っている。さらに、彼が稚内で過ごした少年時代に、流氷に乗って行方不明になった友人や遠洋漁業でなくなった親族の話から、人が事故を起こすことはどれほどの影響を回りの人に与えるのか？　悲しいだけではない、いけないことなのだ、と皆に説き、だから、事故は起こしては「いけない」のだ。事故は死に繋がるのだ。生きて帰るんだ！　涙を目に一杯浮かべていた妻と子供が待っているからだ、とたいへん説得力のある、事故を起こしてはいけない話に感じた。往々にして、これしてはいけない、あれしてはいけない、という安全講話になるのだが、ロジカルでもあり、隊員の心にすっぽり収まる、かつ涙をそそるプレゼンテーションであった。われわれ４３次隊員は出発前の９月１１日、ニューヨークの世界貿易センタービルでの同時多発テロ事件とその映像の印象は、隊員の心の奥深く、安全と平和への関心と感性を特別なものにしていることも影響している様にも想われた。

昭和基地での仕事

１２月１８日に第一便。「しらせ」は氷海航行を続け１２月２３日に、昭和基地沖に接岸。ただちに燃料の送油、氷上輸送を開始した。観測隊員は、しらせの甲板からクレーンで、海氷上に降ろした大型の車両、内陸旅行用の大型雪上車、燃料タンクなどはあっという間に昭和基地へ。大型物資は隊員が運転する雪上車で橇を引っ張って行く。昭和基地の夏期建設作業は１２月１９日より４３次隊員が昭和基地に到着後直ちに開始した。

堀口君との折々の記憶

このような慌しい日々を送り観測隊長業をこなしているとき、２００２年の正月を越えた一月の半ば、「しらせ」にもどり、北海道に住む妻からのファックスが届いた。「堀口さんが雪崩で死亡」。しばし呆然。「えー、堀口が？」というのが、最初に思ったことである。堀口は、まだ、山・スキーにこだわっていたのかな？　と思い、記憶を巡らせた。

札幌では、北大から市電で北へ３０分、われわれの住むアパートの近くに堀口君が住んでいたことを、まず思い返した。私も、北大低温科学研究所の大学院生であった。一度、医学部の公開展示会で、堀口君に誘われ、西尾にも解剖を教えてやるからと誘われ「この神経は何々？？」と嬉々として、いつにない興奮した口調で説明を受けた記憶がある。そして、１９７２年の札幌冬期オリンピックを終わった年の頃を最後に、堀口君とは会うこともなく過ぎ去った３０年近い月日ではなかろうか。いや、一度、堀口君が北大の医学部の学生で、多分、札幌に住んでいる頃、家に泊めてもらったような記憶がある。

その後、北大医学部の解剖学教室の恩師に認められ、助教授、新設の旭川医大へ。そして、岩手医科大学の医学部解剖学教室の教授として迎えられ、若くして、教授になったと聞いていた。東北大の山岳部の仲間とは、北大に行ってから、余り顔を合わすことなく、付き合うことも少なくなっていた。山の会の名簿からも、自分の住所を知らせず、わたくしの年賀状にも現われなくなっていた。現在、東北大医学部解剖学教室教授の百々さんからは、「堀口は、若くして教授になってしまったからなー」と意味不明の言葉を漏らしていたのを、思い出す。百々さんも、解剖学の同業者として、堀口君のことを気遣っていたようだ。

このように、堀口君を山岳部の同輩として、引き込むことなく３０年近くが過ぎさり、友として思い返すことが少なくなっていた。しかも、南極にいるときに、「死」という報せで、「堀口」という朋友を思い出させるとは？！

東北大の山岳部時代のことを想いかえせば、山岳部１－２年の頃、山に行く資金を作るために、昼飯を抜き昼食代を貯める，あるいは安い弁当を手に入れる、ことをやっていた。そのとき、堀口君は、当時、学徒援護会が運営している寮に入っており、昼の弁当が５円か、１０円だった。ただし、麦飯で、おかずが、小さな「塩じゃけ」だけというような、今の時代から考えれば、貧しい弁当であったけれど、慢性的な空腹感を癒すにはご馳走だった。この弁当を堀口君が、毎日、寮の賄いで頼み込んで持ってきてくれた。

堀口君は、東京の「麻布高校」という、有名な進学校から来ていて、東北大には落ちこぼれのような気分でいたように思う（酒の場での会話？）。同じ、理学部の物理系のコースにいて、彼は、間違ったコースにきてしまったとよく言っていた（南極から帰国後、大学の研究室で堀口君から譲り受けた＜ベクトルとテンソル、東京・内田老鶴圃出版＞という教科書を発見した。物理を止めるからと云って譲り受けた）。そして、確か３年目の時に、同じ理学部の地学科の古生物学教室の専攻に編入していった。ところが３年目も終わる頃、医学部に往くといい始めて、北大の医学部の３年生編入試験を受けて、東北大を止めていった。東北大には４年間在籍したと思う。小生より、１年早く札幌に行った事になる。

山岳部では、彼と富山県の剣岳や北アルプスに、また、蔵王や飯豊山に、結構、一緒に登った。でも、彼は、麻布高校でも山岳部に在籍していたので、彼なりの山に登るスタイルがあった。お互いに、大学での勉学、研究への姿勢を要求される大学３年目のころ、堀口君とは、大きく山登りのスタイルの違いが二人の路線を変えていった。彼は、大学で研究をしていくうえでの山登り、小生は、しゃにむに山登りをやるというスタイル。私は３年目になり、教養部の２年目に在籍しながら、山岳部のチーフをすることになった。私の山岳部の運営方針は、合宿や山登りに打ち込む姿勢と海外遠征を要求する路線のために、必然的に堀口君は、次第に山岳部を舞台にした山登りは少なくなっていった。そんな、状況の中での北大・医学部への編入だった。

当然、その後の堀口君との付き合いは、山岳部の同輩とはいえ、殆どなく、小生は、アラスカやカナダの学術遠征隊のことで、しゃにむになっていた。そして、ひょんな事から、北大の大学院に往くことになった私は、堀口君、百々さんと札幌で、再び、付き合うことになった訳です。札幌では無意根山へのスキー登山を何度か一緒にした。

その後は、北大の医学部学生時代に、われわれの朋友として、わが家庭に出入りしていた。　結構、気難しい性格のようなところもあった。でも、裏表のない、どこか、気を許し合える友人だった。考えてみれば、彼の迷い、進路を幾度も変えていく中で、一途に、何かを究めたいという姿勢が貫かれている。山に登る仲間の、単純さ、馬鹿さを共有できた朋友だと思っている。

今日（１月１４日）、「しらせ」のインマリサット衛星通信で百々さんに電話をすると、奥さんが電話口にでて「堀口さんが、びっくりでしょう？　主人と替わるわね？」。そして、百々さんが、

開口一番、「南極も電話がかかるんだ？　便利になったもんだ！」と、とぼけた事をいう。そして、「堀口の顔を見てきた。きれいな、安らかな顔をしてたぞ！」という。百々さん、独特の感情を抑えた、表現であった。

３０年ぶりの朋友の報せが、死亡通知とは！

２００２年1月１４日夜半　白夜の昭和基地、南極観測砕氷船「しらせ」隊長室にて　西尾文彦

堀口さんへ

秋　山　康　夫

堀口さんとの思い出は、大学の山岳部の時代です。

私が山岳部に入ったときには堀口さんは一年上級生でした。

当時の山岳部の部室は仙台広瀬川の近くで、大學のキャンパスとは全く違うところにあったため、学校にもでずに部室に入り浸り、夜は喫茶店で色々夢のような事を議論する日々。

堀口さんは、あっさりとした人でしたので私とは気が合いました。

五月に二人で越後の山に行ったのを覚えています。

春山は、雪と青葉と青空の夢のような世界。何日か後、尾瀬ヶ原に降りました。久し振りの人間や雑踏を求めて、ところどころに川が流れているだだっ広い雪原を真っ直ぐに歩き続けました。

堀口さんの西荻窪の実家に一泊させてもらいましたが、東京の雑踏のひどさにはにびっくりしましたよ。

堀口さんは理学部在学でしたが、途中で地質学をやりたいと専門をかえていたようでした。

やがて「理学部をやめて医学部はいって金をもうけるぞ」などと言って、半年ほど受験勉強をしてあっとう間に北大にいってしまいました。

空いた下宿に、私が入りました。彼の木の机ももらいうけました。

私は学校にはろくろく行かないので、堀口さんと比較され、居づらくなって一年位で引っ越しました。

堀口さんが医学部に入ったのが果たして金を儲ける目的だったのか、今はわかりませんが、少なくともある夢をもっていたのでしょう。私はまさか解剖学をやるとは思っていませんでしたが。いくらなんでも、解剖学じゃ大金持ちになる事は無理ですからね。

今は二人だけの山登りの感動や二人で話し合った将来の話などは、もう誰とも共有できません。あんな事もあったねえと言い合える事もないわけです。

その頃、私の周囲には、中央アジアの草原に行こうとしたり、文化人類学をめざしたり、氷河をめざしたり、色々な夢を追い続ける人が沢山いたなあと今思います。

堀口さんもまた夢を求めたですね。果たして夢を実現できたのかはわかりませんが、彼の夢を追い続けた姿勢は、私の励みになっています。

「３０年振りに清渓小屋で」

阿　部　郁　夫

平成９年９月20日、昭和40年前後に東北大学山岳部員だった会員40人ほどが蔵王苅田岳中腹の清渓小屋に久し振りに集まった。清渓小屋を訪れるのは30年ぶりという人も少なくなく、貴方もその一人だった。山などすっかり忘れているのだろうと思っていたが、岩手山や八幡平を縦横に歩き、冬はテレマークに凝っていることを楽しそうに披露してくれた。源太ヶ岳の素晴らしさも、昔と変わらぬあのクルリとした眼を輝かせながら話してくれた。その源太ヶ岳で―――。

貴方が東北大学山岳部に入部して来る直前の昭和40年春、３月20日、私は北海道日高山脈カムイ岳主稜線上で雪板雪崩を起こし、当時3年生の片桐健一郎が犠牲となった。そして37年後、貴方は知り尽くしていた筈の源太ヶ岳で恐らくは風成雪板を切ってしまった。私は片桐を犠牲にしてしまったが、貴方は自らを犠牲にした。

貴方が入部してきた時、私は今風にいえば５年生で既に山岳部は卒業しており、一緒に山に登ったことはなく、部室での付き合いだけだったような気がする。貴方は北海道大学医学部に入りなおし、東北大学解剖学教室に戻り、岩手医科大学に移るまで、そしてその後、清渓小屋に姿を見せたあの日まで、山の会に顔を見せることはなかった。浦教授のもとでは山登りは許されなかったに違いない。また貴方もその頃は学問のみに集中したかったのだろう。浦先生は東北大学医学部学生寮の舎監をおやめになる折、私を官舎にお呼びになったことがある。ご自分の学生時代、旧制四高山岳部員として山に打ち込み、雪の白山を駆け、日本山岳会草創期の先達を金沢に招いて講演会を催したことなどを懐かしそうに話して下さったのであった。それまで大切にされていた四高山岳部誌数十冊とともに大島亮吉の‘山の想い出’初版本、ヤングの‘マウンテンクラフト’などをくださった。‘しかし自分は大学に進んでからは勉強に打ち込むため、山はやめた’と、解剖実習など上の空だった私を責める風でもなく、お話になられた。そんな先生の元では自然、山からは遠ざかっていたのだろうと思う。

清渓小屋での山談義が一頻りはずんだ後、私は家内を貴方に引き合わせ、‘実は貴方に息子が世話になった’と話しかけると‘やはり基（はじむ）君は阿部さんの息子さんですか’と貴方は応じた。‘そのうち挨拶に行くよ’ともう何十年も経っているというのに、息子の恩師とも言うべき貴方だというのに、飽くまでも先輩ぶる私にいやな顔もせず、偉ぶるでもなく、昔と少しも変わらず、にこにことしていたのであった。もう、その約束を果たす事もできない。帰り途、家内を一緒に貴方と撮った写真は、貴方との最後のものになってしまった。

清渓小屋での集まりは、貴方が１年生だった時に４年生だった、そして後で私の義兄となった目（さかん）邦雄の13回忌を期したものであったが、その目の追悼文集が以前出されており、貴方がそこに寄稿していることをすっかり忘れていた。数週間前、まったく偶然に追悼文集が出てきて、貴方の文章に再会した。その中で貴方は‘山岳部のチーフリーダーとして君のしたいことが何なのか部員に少しも伝わっていない。それが最も大きな問題だ、と目に強く叱られた’と記している。そして、何がしたいのかを求めて、札幌に向かったと書いている。追悼文を書く気になった動機として、‘現在の僕と目さんとの係わり合い、さらには３年の山岳部における活動が現在の僕にとってどんなに大きな意味を持っているのかを考えるに至ってようやく筆を執る気になりました’と述べている。最後に、‘今、目さんにお会いできたなら、僕が何を考え、何をしたいのか胸を張ってお答えできるのですが、それはずっと先のことになってしまいました’と貴方は結んだ。皮肉にも

貴方が目と直接会う日はこんなにも早くきてしまった。しかも、目の命日である１月１３日という日を選んで。

次男が拡張型心筋症で心臓移植登録をしており、山登りの余裕はないが、いずれは貴方と一緒に、というより、今は貴方に連れられて八幡平の斜面を滑ることを本気で念願していたのに、それも叶わなくなってしまった。まだまだその時を待っていて欲しかった。

今はただ、安らかな眠りを祈るのみである。

「ほっぺたのホクロ」

東北大学山岳部OB　前　田　孝　夫（２年後輩）

たしか、堀口さんもほっぺたにホクロがあったような気がする。僕も左側の目の下にホクロがあり、東北大学山岳部に入部した当時、何となく親しみを感じた上級生だった覚えがある。それは、ホクロのせいばかりでなく堀口さんの人柄にあったのだと今、振り返ってみて思う。僕が一年生の頃のリーダー層は強烈な個性が集まっていて、堀口さんは中立的な穏健派のような位置にいた。“東京のいなかっぺ”というあだ名のように、自分を主張しないようでいてなかなか妥協はしない粘りを内部に持っていた。一年生の夏にアラスカ遠征の計画があり、寄付を仰ぐために東京在住のOBを訪問することになった際、東京の荻窪の実家に数日の間宿泊させていただいたことがある。青森の片田舎から仙台に出てきたばかりの僕には東京の街中が新鮮で、地図を片手に住所を頼りに酷暑の中を歩き廻った思い出が強烈であった。荻窪に戻るとホッとした気持ちになれたことと、“東京”の“いなかっぺ”というあだ名の由来がなぜか合点がいったような印象が残っている。

振りかえってみると、一年生の時に一緒の山行に行ったことはあまり無い。最も強烈なのは冬合宿の前に行った蔵王スキー合宿である。雪の少なさから入山途中で時間をロスし、目的の山小屋までに辿り着けずにアオモリトドマツの根元で全員がビバークするハメになったのだが、この時のリーダーが堀口さんだった。下山後の反省会で、リーダーの決断が問題との指摘になり、山岳部の主将を退くことになる一件であった。そのあとに、南アルプスの赤石岳に登った春山合宿では先発隊で一緒に行動した。食べ物にはあまり文句をつけず、慎重そうに味見をして“いけるいける”と笑顔でいうあたりは、食糧係にはありがたかった。このときに採用したビーフンとマトンはさんざんな不評であったにも関わらず…。

その後の大学紛争が激しくなるとともに少し縁遠くなっていったが、医学部に入りなおすために受験勉強をしていると聞いた時はすごい決断だなと感心した。僕も同じ理学部・物理で後輩にあたり、このままで良いのかなと悩み始めていた時期でもあった。２０数年振りで再開したのは、平成９年秋に蔵王の清渓小屋で催された「相原OB・目（さかん）OBを偲ぶ夕べ」の時であった。久しぶりに会って、テレマークスキーの話を熱く聞かされたが、現役時代の堀口さんがスキーで滑走する姿はあまり印象に残っていない。…ということは下手でもなかったということなのかもしれない？その堀口さんのテレマークスキーを見る機会がもう無いのかと思うと、とっておきの大切な楽しみを失ったようで寂しくてならない。ほっぺたのホクロが右側だったか左側だったかも確かめられない。

いまは、静かにご冥福をお祈りするほか仕方がない。　嗚呼。